

5 学力向上部会のまとめ

(1) 学力向上のための取り組み

- ・研究テーマに沿って、年間一人一回以上の研究授業をおこない、内容や指導方法についての研究を進める。
- ・その授業のめあてや活動内容を明確にして子どもたちに見通しをもたせ、わかりやすい授業をめざす。
- ・教材研究を十分おこない、発問の仕方を工夫する。
- ・必要に応じ、個別指導や補充学習をおこない、基礎・基本の定着をはかる。
- ・授業の中で、書いたり発表したりする機会を多く設定し、表現力の向上に努める。
- ・朝の学習・帰りの学習の時間を設け、漢字学習や計算問題に取り組ませ、短時間での反復練習をおこなう。
- ・漢字博士検定に参加し、漢字力の向上をはかる。
- ・計算力テストを実施し、計算能力の定着をはかる。
- ・毎時間ごとに子どもの学習状況を評価し次の指導に生かすため、ノートチェックをおこなう。

(2) 成果と課題

今回、以上のような取組を進めてきて成果としてあげられることは、「今、子どもたちにつけておかねばならない力はどういうことであるのか。」ということや「今、自分が指導している内容は、この先どの内容につながっていくのか。」など、教師が子どもたちを指導していく上で、見通しをもって指導することができるようになってきているということがひとつあげられる。見通しをもてたことで、重点的に扱う内容や必ず定着させておかなければならない力などがわかってきたように思う。

次に、日々の授業の中で、自分の考えや思いなどをノート等にかかせたり、書いた内容をもとに発表したりする機会をできるだけ多く設定してきたことで、子どもたちは表現することに対し、以前に比べ抵抗が少なくなり、その力は向上してきている。「書くこと」で自分の考えていることがまとまり、その考えや思いを発信することに自信をもてたように思う。

さらに、授業の中や、朝・帰りの学習の中で計算問題や漢字学習に取り組んできた。結果として毎年実施している計算力テストでは、以前までのデータと比較すると誤答は減少してきており、計算力は確実に定着してきていることがわかる。また、漢字学習に対し、「覚えてきている」という手ごたえを感じていることで、以前に増して意欲が出てきている。繰り返し学習することの大切さを改めて認識した。

一方、課題としてあげられることは次のようなことである。

一つめは、小学生には日々の活動において、手を動かしたり足を動かしたりと、体全体を使って経験させ吸収させる必要性を今まで以上に感じたことである。中学生に対しては、指導の中で説明を加えるだけで理解できる部分が多い。これは小学生のときの体験活動が生かされ、頭の中でイメージできているからであろう。

二つめは、国語などだけではなく様々な教科や活動の中で気づいたことや工夫したこと、体験したことなど「書く」という機会を数多く取り入れていくということである。成果のところでも述べたが、授業の中で書かせる機会を多くもってきた。さらに、豊かな表現力をはぐくむために、「書くこと」を大切にしていきたいと考える。

三つめは、いろいろな情報の中から必要なものを取り出し、自ら問題解決に向けて進めていくということが課題であると感じている。普段の子どもたちの様子から「これどういうこ

とですか。」「どれを使えばいいの。」という言葉が多く聞かれ、教師が説明を加えれば、「なんだ、そういうことか。」と理解できるのに、じっくり考えず結論を急いでしまう傾向があるからである。

四つめは、漢字定着についての課題である。先ほどに記したように学習に対する意欲は増してきているが、定着しているかどうかという点で少し不安がある。見てみると小学生より中学生の方が各教科で学習していく内容が大幅に増加してきており、漢字学習にかける時間が少なくなっているのかもしれない。

以上、他にもいろいろ考えられると思うが、成果と課題として主なものを取り上げてみた。これからの指導を通して、成果の部分を中心に伸ばし、課題の部分を改善していけるよう日々の取組を進めていきたいと考えている。

(3) 職員アンケートから

[小中一貫教育の中で気をつけてきたことや意識してきたこと]

- ・ 9年間を見通して、今、低学年の子どもたちにどんな力をつけておかなければならないかということ。例えば、中学生になったとき、テストを受ける態勢がきちんと整えられているように、家庭学習を習慣づけさせるなど。
- ・ 学習している内容が中学校に移り、どの内容とつながっていくのか。子どもたちが中学生に成長していく上で、なるべく段差なく学習を進めていけるようにはどんなことを小学生の子どもたちに身につけさせておけばよいか。そういうことを意識してきた。
- ・ 子どもに少し難しい課題を与えること。その課題で目標としているところは完璧にできなくていいので、「がんばってみよう」と思ってくれればいかなど思っている。もしその課題ができれば、どんどん難しい問題に近づけていきたいと思っている。
- ・ 小中一貫教育を進める中で、中学校の学習内容や方法についても改めて考えるよい機会となっている。小学校での外国語活動を通し、外国の文化や言葉に慣れ親しみ興味を持ちながら、さまざまな体験を楽しむことを目指してきた。現中学1年生は、中学校での学習も楽しみながら余裕をもって前向きに取り組んでいる。また、学習だけでなく、教師みんなで子どもたちを見ているという意識が高まってきていて、ごく自然体で関わり合っているのではないかなと思う。
- ・ 日頃、中学生と接している中で、「足りない」「弱い」と感じる部分は、小学生と接するとき意識して指導にあたっている。返事やあいさつなど。
- ・ 教師と児童・生徒との関係づくりを意識してきた。小学校6年生から中学校1年生に進級した際に、授業において生徒は秩序をもった態度が望ましいと考える。一方で、教師に認められているという安心感が必要だと考えるので、授業態度や言葉遣いに緩急をつけるようにしている。
- ・ 小学生にも朝の挨拶も含め積極的に声をかけるようにしている。子どもたちからも気軽に声をかけてくれるようになってきた。
- ・ 中学校での学習を見越して、あらかじめ小学校でおさえておくことは何か、と常に考えてきた。また、教科書の発展内容は必ず触れるようにした。特に、実験器具の操作は小学校から使いこなせるように、そして、慣れさせるよう意識した。授業の中で出る子どもの素朴な疑問には、できるだけ応えるようにしてきた。今、興味を感じていることは、必ず教師の手でつかむようになってきた。

[授業研究を通じて感じたこと]

- ・上の学年や中学生の課題が何で、その力はどこでつけておかなければならなかったのかというを感じた。
- ・中学校の先生の授業を見て感じたことは、授業のスピードが速いということである。中学生はいろいろな経験や学習をしてきているので、説明を付け加える程度で頭の中でイメージできる。そのため、ひとつひとつ確認していかなくともスムーズに進められる。小学生には今まで以上に学習の中でいろいろな経験させていく必要性を感じた。手を動かし、足を動かし、体全体を使って自分の中に吸収させていくということである。
- ・人数が少ないこともあって、質問されても全員それぞれの意見や思ったことが言える、わからないところがあればすぐ聞けるところがいいなと感じた。中学校の先生がおこなう6年生の授業は中学生にされているのと同じようにされていた。他の学校では味わえないいい経験をしているなと思った。
- ・新しい試みをしたので知識が増えたように感じる。今回の研究とは関係ないが、年々学力が落ちてきているように感じる。
- ・コミュニケーション活動では、児童・生徒の興味・関心のあるもので取り組むことが楽しい活動の基本となる。また、異学年合同のALTとのお別れ会のような活動も児童・生徒がモチベーションを高めながら取り組める活動になったと思う。各学年の目標を定め、意識しながら取り組んでいくようにしたいと思った。
- ・一貫カリキュラムをもとに、今、全体から見て、どの部分をどのようなアプローチで学習しているのか、ということ把握することが大切だと感じた。
- ・子どもたちの実態や自分の授業についてじっくりと考える機会になる。他の先生からの意見やアドバイスをうかがい、改善点を知ることができた。参観の先生から客観的な子どもががんばっている点、伸び、よいところを指摘してもらい、それらを子どもたち自身に伝えることで、学習意欲とともに課題解決への意識づけができたように思う。
- ・小学校の先生の授業のていねいなこと、板書の少ないことなどを感じた。
小学校で授業をしていると、中学生への授業でも意外なところで、自分でも驚くくらいていねいに教えているときが出てきた。

[授業の工夫]

- ・特に低学年は基礎的なことを繰り返し練習している。例えば、算数のノート指導では、「問題を書く→大切な言葉に線を入れる→問いかけ文に波線を入れる→式と答えを書く→自分の考えを書く→発表して話し合う」とパターン化している。必要に応じて個別指導をしたり、発展的な学習に取り組ませたりしている。
- ・授業の中でいつも気をつけていたことは、一つ目はこの時間に学習する内容をきちんと子どもたちに確認させること。二つ目は自分の考えや感想を多く持たせ、ノートなどに書かせることである。自分の担当している時間はできるだけこれらのことを意識して授業してきた。結果として、学習内容を確認させることにより学習意欲が増してき、書かせることで話すこと、筋道立てることができるようになってきているように感じる。
- ・板書はなるべくきれいな字でわかりやすく書くように心がけている。ノート指導も誰が見ても読めるようにまとめさせている。学習内容は、児童・生徒が納得できるまで時間をかけておこなうようにしている。自分が一緒にできる内容であれば、ともにおこなうようにしている。
- ・ホワイトボードを使い、自分の考えを発表したり説明したりする機会を多く設定するなど、表現力をつけさせる授業をふやしている。また、異学年合同の授業など。言葉の確認のために辞書をよくひかせるようにしている。
- ・(英語) 授業はじめのウォームアップでは、教師と子ども、子ども同士などの形で質問し合っ

ている。コミュニケーションの練習であるとともに、子どもたちの様子を把握するのもよい機会となっている。授業のポイント、ワーク、プリント、教科書をひとつのサイクルとして、学力の定着に心がけている。また、表現力育成のため、自分自身のことを語る文づくりのチャンスを多くし、クラスで発表という場を設けるようにしている。

- ・ノート指導では、できるだけ漢字を使うよう指導している。普段から使うことが大切だと考える。
- ・音読や朗読、発言等、子どもたちが声を出す機会を多くしている。また、学習内容によっては、それぞれの目標や評価規準は学年ごとに異なるが、同一場所で学習する方が効果的と思われるものについては、そのようにみんなで学習する機会をもっている（朗読発表会、弁論大会、漢字テストなど）。その他として、ワークシートを作成している。
- ・小学校の授業にワークシートを取り入れ、ノートのかわりにした。また、中学校の実験器具を多く使うようにして、後々実験がスムーズに進められるように工夫してきた。

[授業内容以外の工夫]

- ・できあがった作品を、できるだけ多くの人に見てもらえるような場所に掲示したり、その感想を書いてもらったりしている。
- ・子どもがひとりの授業（理科）は、発表をしたり他人の発表を聞いたりすることができない。だから、「春のしぜん」や「夏のしぜん」の地図を作って掲示し、多くの人たちに見てもらい、声をかけてもらえたらと考え、おこなっている。
- ・年3回の定期的な英語検定への参加。そのための放課後の補習は欠かせない。また、隔年に伊都地方の英語発表会へ参加するようにしている。授業中の英語から発展した町紹介や学校紹介、英語の歌などで楽しみながら参加できるものを考えている。今後は異文化理解ということで、ALTの先生から外国の行事なども教えてもらったり、逆に日本の文化を教えたりする取組もしていきたい。
- ・他の先生の理科の授業、特に実験の準備などで自分にできることがあれば手伝いたいと考えてきた。しかし、先生方からは遠慮があるのか煙たいのかなかなか相談してもらえなかったのは残念。